

新日本婦人の会(新婦人) 宇城支部
 — シクラメン班 —
 Shinnihonfujinnokai ukishibu
 - shikuramenhan -

1962年に命と暮らしを守るため、全国的に結成された新婦人。1993年、宇城支部と同時にシクラメン班が誕生。2003年に新婦人は国連 NGO に認証される。女性・子どもの権利保護や平和維持のために取り組みを続ける。現在班員は21人。12月13日⑩13時30分から松橋町築切集会所で「知っ得カフェ『ダム問題を考えよう』」を開催する。

宇輝人

vol.56

戦争と平和を伝える そして未来へ——

戦争の記憶を次世代につなぐ
 平和な世界に向けて活動する「新婦人」。宇城支部シクラメン班の班会では、一人一人が平和への強い想いを語り合う。中でも宇土市の藤末皐月さんがユーモアを交えて話す戦争体験は、戦争を知らない世代の心を揺さぶった。

この経験を広く知ってもらいたい。同支部は2014年6月に不知火公民館で藤末さんのお話会「戦争と平和を語ろう」を開催。藤末さんが公の場で多くの人に戦争の現実を伝える姿に、会員は皆、意欲をかき立てられた。

—— 私たちも身近なところで戦争と平和を伝えられないだろうか。これをきっかけに、毎年、市役所やさまざまな施設で「原爆と人間」の写真展を開催。市民の皆さんに戦争の記憶を知ってもらおうと同時に、核兵器廃絶を求める署名運動も行ってきた。会場で集めるアンケートに寄せられたメッセージは活動の原動力にもなる。

平和への想い強く
 新婦人では、毎年8月に広島・長崎で開かれる原水爆禁止世界大



1 2019年、市役所で大行進出発式 2 中央図書館でパネル展 3 笑顔あふれるシクラメン班会 4 手製の防空頭巾をかぶり戦時中の生活を八代高生に話す元松さん 5 年に2度、お楽しみ寄せ植え会 6 幸せの鐘で平和の祈り

右手前から 元松芳子さん、河原畑タミ子さん、高田裕子さん、植田逸子さん、松本佳子さん、日高紀登美さん、小川紀子さん、宮崎タキ子さん、山田とも子さん

そんな元松さんも、最初に戦時中の話をしてほしいとお願いされたとき、一度は断った。それは、話す内容の生々しさが、当時亡くなった友達への申し訳ない思いから。話をすると決めた朝には、仏壇の前で手を合わせ、亡き友達の名前を呼びながら「人のためになることだから」と断りを入れた。

「過去は変えられない。でも未来は変えられる。未来に向けて伝えるべきだと思ったんです。」次世代が築く未来へ平和をつなぐ。

戦争の記憶をたどる映像制作のため、話を聞きに元松さん宅を訪れた八代高の山口凌さんは、「私は目の前で同級生が命を落とすことは想像できません。でも、この事実は戦争の悲劇を伝える上で重要なこと。お話を元にさらに戦争の現実を調べていきたい。」と話す。本物の話は心に響き、想いは確かに届いた。

会員みんなで身近な問題を語り合いながら、新たな取り組みに一步步踏み出すことで、出会いとともに気付きや喜びが生まれる。連綿と伝えることが、平和で暮らせる未来への道しるべになると信じて。

会へ向けて各地域から大会会場へ国民平和大行進を行う。シクラメン班は松橋から宇土までのルートを一歩、二歩と踏みしめて歩く。

今年の8月9日、長崎原爆の日には、道の駅不知火で集会を開催。「幸せの鐘」の音に平和への祈りを込めた。「来年は語り部活動やちよつとした演奏会も一緒にできれば」と新たな展望も広がる。

「死ななくていい」今、未来へ
 藤末さんから始まった語り部の活動は今、元松芳子さんに引き継がれている。

2018年の夏に活動を始めた元松さん。ある小学校で語っていると一人の体格のいい少年に目が留まった。全く聞く気のない様子。しかし、話を進めるうちに背筋をピンとたてて真剣な面持ちでこちらを見つめるように。話をして良かったなと思った瞬間だった。

「中学2年生で戦争が終わったとき、まずほっとしました。明日から逃げなくていいんだ、もう死ななくていいんだと。そんな体験今の人たちには分からないかもしれない。だけど、私が話すことは紛れもない事実なんです。」